

第2次福岡市立高等学校活性化検討委員会（第2次会議）第4回会議議事録

- 1 開催日時 平成22年3月24日（水）18:00～20:00
- 2 場 所 福岡市役所15階1503会議室
- 3 議 題 (1) 福岡女子高校の活性化について
(2) 福岡西陵高校の活性化について
- 4 出席委員 進藤委員，是永委員，中村委員，藤本委員，宮崎委員，清水委員
(順不同)
- 5 傍聴者数 8名
- 6 議事概要

(1) 福岡女子高校の活性化について、事務局より資料に基づき説明があった。

(委員) 前日も意見交換した女子教育の推進について、広く市民から理解が得られるのかという視点で、再度ご意見をいただきたい。

(委員) 伝統も大事であるが、今後の教育成果の見通しも持って、女子高校の改革を押し進めてほしい。また、公立高校としてあえて女子校を残す必要があるのではないかと。女子教育に特化した学校であることを広くアピールして、広範囲から入学できるシステムを検討するのも一つの方法ではないか。

(委員) 伝統が過去のものになっている気がする。受け継がれたものではなくて昔はよかったという形が現在の姿になっていると考える。時代や社会とそぐわず、生徒とのニーズのずれが出てきたのが今の女子高校の姿なのではないか。だからあえて女子校にこだわる必要があるのかが疑問である。

(委員) 地域や保護者のニーズがあり、女子校として存続をさせていくということであれば、他校のよいものを取り入れながら学校の取組を充実させて特色を明確にだしていくという展開を模索していけば良いと思う。

(委員) 女子高校において伝統が受け継がれている実情はないと感じる。昔は良妻賢母を育てる学校ということで確立された伝統を、社会が変化してこれを求めなくなり途切れてしまっている。そういう中で今に至ったと考えたときに 現代社会における女子教育についてもう一度考え直してそれを今の女子高校に打ち込むことができるのであれば存在意義があると思う。公立の女子校という自体にも意義はあると思うが、希少価値だけでは意味はないので、そこできちんと育まれている姿を作り出せることが残す意義だと思う。

(委員) 女子高校が爆発的に魅力を出すには、女子校でないと出せないと考える。たくさんある共学校の中の一つとして新たな特色を打ち出してアピールするのはとても難しいのではないか。それよりも女子校のままで何か一つくさびを打つほうがよい気がする。伝統の継承という点については世の中全体が軽視している傾向があり、見直す

時が来ると思われる。あわてなくても良いのではないか。

(事務局) 女子高校がよくなっているのは十分にわかっているが、実際に中学校で進学指導をすると希望が少ない。家庭学科についても男子にもニーズがある。共学化をした他県の報告書を見ると男子ならではの奇抜な発想が女子生徒により刺激を与えているという意見も出ている。女子校か共学化かという論議よりも特色ある各学科を活性化するという発想に立ったら、違った展開が見えるのではないか。男子の入学可という学科があっても良いと考える。

(委員) 今世の中が荒廃しているのは、男女の役割がきちんと育ってないからだ。女性の役割は、子どもを産み育て、社会に送り出すことである。子どもを成長させるのは母性である。母性を小さいときから育むことは大事なことだと思う。そのためにも女子校は一つの大事な教育機関だと考える。

今、高校生も大学生も就職率が非常に悪いが、取得資格をアピールしても企業ではあまり役に立たない。企業は、きちんと礼儀礼節ができ、人間の基本ができている人を求めている。特にこれから先はなおさらである。その側面からも、女子校は女性としての役割がきちんと育っていく教育機関の一つである。

(委員) 4学科を統合し、コース制を導入することについて、また、魅力ある家庭科にするためにどのような家庭科の専門教育が求められているかについてご意見をいただきたい。

(委員) 1年生で調理師コースを選んで入ってきたら、他コースへの変更は可能なのか。

(事務局) 調理師コースは、免許取得の関係で他コースに変更できないものと考えている。

(委員) 一般コースにおいては2年から3年になるときにコース変更は可能か。

(事務局) 具体的な中身については、学校と協議して決めていかないといけないと考える。

(委員) あまりころころ代わると、専門的な勉強ができないことも考えられる。

(委員) ある程度の最低限の単位数がないと、全部が中途半端におわる可能性はある。

(委員) 1年生の一般コースというのは、2年3年の分類されるものの基礎的な部分は1年生で満遍なく学ぶということか。

(事務局) そのように考えている。

(委員) 一般コースというのは、具体的にどのような勉強をするところなのか。

(事務局) 家庭科の専門科目を広く勉強する。1年で家庭科の基礎的な科目を勉強して、2年生以降は広く浅く勉強する形になる。

(委員) 現学科が全部活性化していないのか。活性化している学科があるのならそれは扱う必要がないのではないか。学校の現状の取組の説明をしてほしい。

(事務局) どの学科も一生懸命活性化に向けて取り組んでいる。しかしながら、定員枠があると、不本意入学の結果中退する生徒もいる。中学生のニーズなどにより各学科定員枠の40名が集まりにくいので、大きなくりにした方が良く考えた。

(委員) それは活性化というよりは、入学の時点で志願者が多いところとそうでないところがあるということか。

(事務局) 何をもって活性化しているかは難しいが、志願倍率は一つの指標としている。女子高校の平均志願倍率は、最近少しずつ上がってきている。生徒指導面においては少しずつ評価が上がってきているが、毎年学科は違うものの定員割れの学科がある状況がしばらく続いている。現実としてニーズに沿っているのかということについてご意見を伺いたい。

(委員) 志願倍率で考えるならば、定員割れをしている学科は活性化していないのではないかという見方もできる。一方で、家庭の専門学科の活性化といえば、そこで学ぶ生徒が興味深く生き生きと学んでいるという状態があれば活性化しているといつてよいと考える。しかし現実には、40名全員が生き生きと学んでいるとはいいにくく、志願倍率も伸びてない。

調理師免許取得を目指す場合は1年からクラスを固定する必要があるが、大学に進学して調理師と栄養士の両方の取得を考えている生徒は食物を中心とした教養的な家庭科を勉強して大学に進学することに力をいれればよい。

以上のようなことから、学科の活性化を考える場合、相互乗り入れという形で学科の壁を取り払って定員枠に縛られないで熱心な生徒がいる学科にすることが先なのかなど考える。

(委員) 学科のネーミングを考えることも一つではないかという気がする。

(委員) 入学後、考えていた学科と違うと感じる生徒が少なからずいることを考えると、それが3年間続くよりも、1年生の間に満遍なくやることで自分に合うものを見つけるコース制の方が、生徒にとっては良いのではないか。また、7割以上の生徒が進学している実態や卒業後に専門を生かした就職が少ない現実を見ると、調理師コース以外は、3年間だけで技術を完結させる必要はないと思う。専門の勉強をする時間は今より少なくなることは予想されるが、卒業後を考えたら、コース別のほうがよりいいと思う。それ以前に、それぞれのコースが時代に即し、生徒が興味を持てる学習内容になっているのかが大事である。街中の若者のファッションを見てみると、服飾に興味を持たないはずがない。それは、学習内容と世間がずれているからではないだろうか。

(委員) 魅力ある福岡女子高校を目指すために、どのような特色や取組が必要かということで、活性化策などについて、ご意見を伺いたい。

(委員) 専門においては、世の中にプロフェッショナルがいるので、その人に1年間のカリキュラムの中で何時間か教えてもらうのも一つの方法かと思う。

(委員) 現在地域に根ざした取組はあるのか。

(事務局) 食物調理科では小学校の調理の授業に入って授業のサポートを行なっている。

また高校生サポーターモデル事業として、卒業間近の生徒が小学校に行き、授業時間の補助をしたりしている。

(委員) それは、専門の提供か。

(事務局) 普通科の生徒が行っているケースもある。

(委員) 例えば、作ったものを販売したりすることはあるのか。単に作品完成だけではなく、外との関わりを体験することで作る喜びや、学ぶ喜びなどが体験できると意欲が高まるのではないか。3年間で技術の完成は必要ないが、その間にセンスを磨く必要はあると思う。そして、こういうお店を持ちたいや、こういうところで働きたいなどの将来のモデルが見えるような社会参加の機会があるとよいのではないか。

(事務局) 服飾デザイン科は、博多織、博多座の観劇で衣装を見に行ったり、店長を講師に招いてアパレル販売の方法を学習したり、ものづくり教室で、親子や校区の主婦対象のエコバック製作教室や帽子製作教室をしたりして地域と交流したりしている。食物調理科は、集団調理実習として食事の提供などを行っているが、衛生面で十分な配慮をしながら行なわなければならない点があり、簡単には実施できない実情がある。保育福祉科は幼児からお年寄り、障がいのある方へのふれあいを続けているので、最終的には思いやりのあるやさしい子どもたちに育っていると感じる。生活情報科は、西区役所でインターンシップを行って職場体験をしている。普通科については、中学校の延長のようになかなか夢や目標が設定しづらい。そこでプログレスノートという進路カルテをつくって、経済産業省が唱えている社会人基礎力（3つの能力と12の要素）を1つずつチェックしながら自分の成長を見定めて社会で活躍できる子どもを育てており、それが女子高校としての魅力の一つでないかということを目指して取り組んでいる。

(委員) 今説明があったことをわかりやすく発信していくと魅力につながる。

(2) 福岡西陵の活性化について、事務局より資料に基づき説明があった。

(委員) 生徒の進路希望を実現させるための普通科の在り方について、特別進学コースの設置、進学体制の充実、生徒の意欲を引き出す方策などについてご意見を伺いたい。

(委員) 入学時における国公立大学の希望者が、2年3年になるとだんだん減ってくるのはなぜか。

(事務局) カリキュラムのあり方も一つの理由と考える。2年次に大きく文型と理型に分かれ、3年次になるとさらにそれぞれから国立コースを作るので、だんだんと絞られてしまう。その中で、自分の実力等に合わせながら希望者が減ってきている。

(委員) 難関大学にチャレンジする意欲があるのに、サポートの体制が足りないのか、それとも生徒のもともとの意欲がないのか。

(事務局) 家庭の経済的な部分も当然影響していると思われるが、力を持っている生徒に対して、組織的にさらに上を目指す取組みは弱いと思われる。

(委員) 今年是全国的に国公立大学志願者が多かったことから難関私大に行くとする
と経済環境が大きく優先すると思う。高校授業料無償化の話もあるが、それを社会が
どんな形で支援するかなのだろうが。

(委員) 現在西陵高校では成績に関して等質クラスでクラス編成をしており、1クラス
の中に様々な進路希望者がいる。他校のように進路希望別にクラス編成をする方法も
ある。例えば国公立を目指すクラスでは、きつい、辞めたいと思っけていても、回りが
そうでなければ、自分も何とか維持しようとするが、進路希望が混ざってれば、き
ついと思ったときに、易きに流れる傾向に拍車がかかるところはある。しかし、高校
は部活動を含めた高校生としての生活や人間関係を作る目的とかあるので、簡単な話
ではない。効率優先でクラス編成すれば進路実績はあがると予想はしている。

推薦入学で受検する生徒の数によって実績も変わってくる。推薦入試は原則専願に
なるので、1校しか受験できない、一般入試は複数校受験できるので、1人につき複
数校の合格者も出てくると、当然学校としての進路実績には差が出ることになる。高
校によっては推薦入試をさせない学校もある。こうすることで多くの4年制大学の合
格実績をホームページ等で公表できる。実績に絞ってするならば、特別クラスを作っ
て推薦入試を認めないで行うやり方も方法としてはある。

西陵高校をどうして行くかを考えた場合に、大学の合格数、実績数、難関私大、関
東関西に進出する気迫のある生徒をそのまま維持していくという観点から言うと、あ
る程度方法は見えている。

(委員) 市立高等学校の活性化が言われて何年もなる。西陵高校もその一つに挙げられ
て何年もなる。そういうことがあって具体的にその頃から今までにどこにメスを入れ
てその成果がどこに現れたかがあれば教えてほしい。活性化するためには制度、仕組
み、内容を変えたりしないといけないが、その中で一番大きな役割を持っているもの
は、教える人たちそのものが変わることが一番だと思う。自分が変わらないといけな
い部分が変わってなくて、いくら制度を変えてもどうにもならないと思う。みんなが
きつさをどこかで味わわないといけないと思う。女子高校も先生方もものすごくき
つい思いをされ、なんでここまでしないといけないのかという思いもされて、それでも
頑張って一部はものすごく成果が出ているのではないか。それができていないのなら先
ずそれを考える必要があるのではないか。

(委員) 事務局で長年市立高校の活性化を進められてどの点が変わったのか今後整理し
てほしい。西陵高校の場合はどうか。

(事務局) 西陵高校においては、7～8年前に、志願倍率がとても下がった時期があった。
その当時言われていたものの1つは、生徒指導であった。合わせて進学実績が振るわ
ずに成績を伸ばしてくれないという風評が広がって結果そのような志願倍率になっ
たと考える。そのときの取組の一つが、風紀面の改善のための指導、遅刻等生活面の改
善指導であり、全校挙げての取組で生徒指導面はかなり良くなっている。進学実績に
ついては、徐々に向上しているが、まだ、期待に応えきっていない。課外補習など、
様々な取組がなされているが、いっそうの充実が求められている。

(委員) 学校において成績を伸ばすことと、人間性を育むことの両立は難しいと思うが、
現場の先生方がどう変えたいか、どうしたいかが、見えてこないと思意見が言いにくい。

(委員) 進学実績を伸ばしたいのであれば、明らかに他校がやっているようなクラス分けテストでクラス編成を1年次からやってそれぞれの成績に応じた伸ばし方をしてあげることある面では大事ではないか。ただ西陵高校の生徒は礼儀正しい生徒も多いし、あいさつができる生徒も多い。大学進学が人間の能力を測るすべてではないので、それが学校の目標であれば今のままやってもよいのではないか。

(委員) 西陵高校の先生が一生懸命やっていないと言っているわけではないので、誤解しないでほしいが、一生懸命やっても、違うノウハウを持ってこないといけない場合がある。部活動については、強くする顧問は、どんな生徒が集まっても強くする。ところが、強くしない顧問は、実力を持った生徒が入ってきても、弱いチームになる。集団の中に、ノウハウを持った人が来ると、その教え方を研究して回りも強くなる。どこかが強くなるとライバル意識がでてくるからではないか。オーケストラ部があれだけ素晴らしい実績を上げているのであれを参考にしない手はない。勉強にもそれは当てはまるのではないかと考える。受験指導が上手な先生の教え方、受験勉強の仕方を教育課程に組み込んで、それをみんなが見ながら行うといいのではないか。そのような研究に関しては努力不足だと思う。身内の中に、そのような人がいないのであれば、どこかから連れてこないといけない。

(委員) 企業の中にも同じようなことが言える。誰か牽引者がいる。誰かが良くしていかうという意識がないと学校は良くならないのではないか。部活動も引き受けたからには強くしたいという思いが生徒に通じたときに頑張る。女子高校も今は見違えるほど良くなっている。先生方の努力も大変なものだったと思う。ただ、それが継続していかないといけないそのためには、先生方のかなりの力と骨折りがあがる。

(委員) オーケストラ部については指導者が変わってから見違えるように生徒たちも変わってきた。同様に、今校内に「東大の問題を解く会」を作って数学の力量を上げている教員がいる。ただ残念なことに、それを見習おうとする教員を増やせていない。種はあるが、芽を出すところまで行ってない。

(委員) 教育者には基本的に子どもたちを完璧に次の時代を担っていく日本人として育て上げていくという考え方が根底にないといけないと思う。

(委員) ある程度の成績の生徒が入ってきて、卒業するときその能力を伸ばせなかったことを、自分たちの責任として、自分たちのこととして受け止めることが大事だと思う。特進コースを作って伸ばすというのも一つの方法だと思うが、それ以前に、先生方が責任持って自分のこととして受け止めてすることが大事だと思う。

国公立と私立難関とでは、目指す生徒は勉強の仕方が違うと思う。現在の類型は、国公立の文型を目指している学校という気がする。受検科目などぜんぜん違うので、国公立に力を入れると、私立希望の生徒はどうなるのか。私立希望者がおろそかになってしまうのではないかと感じる。

(委員) 学校は、管理職以外は、後は一緒の立場である。新しい事をしようとするれば、ほとんどは反対者で、極端に言うと自分一人の場合もあり、それぐらいの覚悟でやらないといけない。ところが、そうはいいながらも、一人の力ではとても難しくやっばり応援者がいる。それにはPTA総会など保護者の意見を直接聞く場を設け、自分たちが変わらなければと先生方の意識を変える事である。それでもなかなか上手くいか

ないときに、仕組みとして特進コースを作るのも一つだろうが、その前提がないとどんな仕組みを作っても一緒と思う。これを高校の先生みんなに聞いてほしい。でないとここで一生懸命話していることが寂しくなる。

(委員) 校長先生や先生だけではどうしようもならないこともあるだろうし、校長先生が外部から誰かを連れてくるわけにはいかないだろうから、活性化についてこれだけ議論しているわけだから、人事配置については是非福岡市教育委員会としても強く受け止めて対応いただかないと上手くいかないのではないかと思います。

(委員) 教員に直接生の声を聞いてもらうということは自分も必要だと思う。以前はごく一部の教員が行っていた中学校訪問を、数年前から全職員で訪問するようにした。そうすると中学校の先生から、「生徒を伸ばしきらない」や「生徒の服装が乱れている」などを直接言われて帰ってきて少し考えるようになったという印象を持っている。同様に、保護者や生徒から直接言ってもらえる場をもっと広げていくと教員自身の意識も変わっていくのかな、社会も見えてくるのかなと思うので、これからやっていかなければならない。

(委員) 課題のある学校に行き、それを変えるためにはみんなが苦労して変わらなかったこともある。それなりの覚悟はするが、やるからには絶対に一人ではできない。ただ、どうしたら先生が味方になってくれるかという、中学校の場合は地域を味方にする。そのためには自らすべての地域の会議や行事に頻繁に参加する。そして地域が味方になると保護者が味方になる。そうすれば、校長の考えが学校に取り入れられる学校になる。これは外堀から埋めて行くやり方であるが、最終的には先生たちを大事にしないとイケない。一人ひとりの先生はいいものを持っているので、そこを認めていくと絶対に味方になる。その人数をいかに増やすかである。高校には地域がなく、通学区域が広いので難しいだろうが、その発想は大事だと思う。

(委員) このようなことに取り組んで、意識が上がってくれば西陵高校の活性化にもつながっていくのではないかと。

(事務局) 高校のことは本当に気になっていて、自分なりにもいろいろ考えてきたが、なかなかはっきりしたものが見えてこない。なぜ今後も女子校が必要なのかは、もう少しきちんとした考えを持たないと世の中の議論に耐えていけないのではないかと。なかなか難しいが、さらに議論をお願いしたい。

また、最後のほうで、先生の意識ややる気、意欲などの議論が出たが、世の中の変化に応じた枠組みの変化や教え方、生徒のモチベーションの持たせ方等も工夫しながら指導していくことは常に求められる。いままで論議をしていただいたことに加えて、学校がいい学校であり続けるための先生の意識の持ち方、指導の仕方、組織的な取組をどうしたらよいかなどの議論をしていただけるとありがたい。今後ともよろしくお願いしたい。